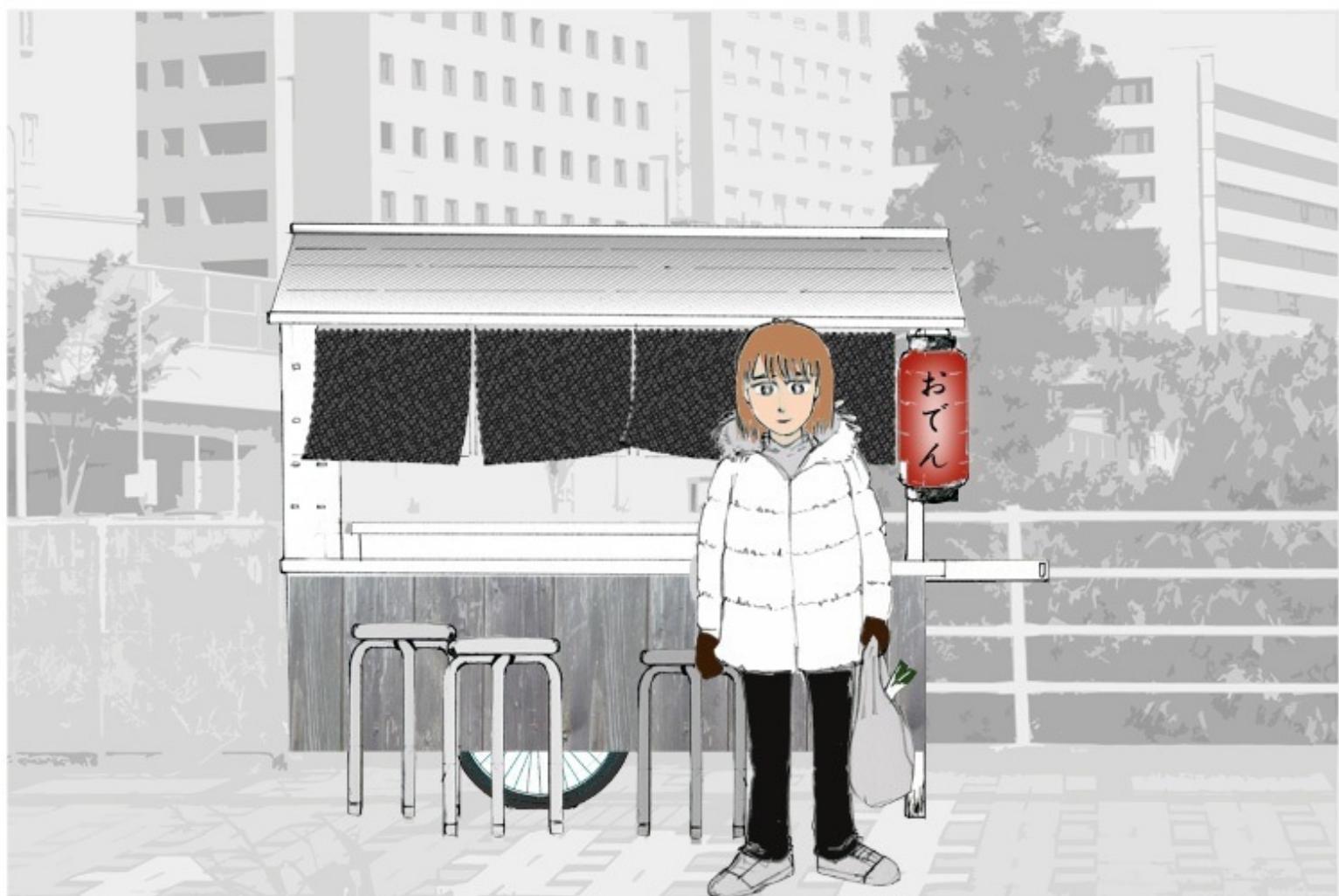


# 夕暮れの赤ちょうちん



真下魚名

## side A

---

いやーまったく、やっぱりクルマで来るんだった。

自動ドアが開いた瞬間に、この寒風だ。

「ひーちゃん、寒くないか。」

「大丈夫だよ。」

まあ、ヒーターが温まる前に大抵着いちまうんだが、鼻が赤くなりそうな風に吹かれるよりは、余程ましなんだがなあ。

何のために、鍋の材料買いに出たんだか。

あれ、あんなところにあっつけ。行きには見なかったと思うんだが。

懐かしいなあ。

「ひーちゃん、あれ見える？赤ちょうちん。」

「え、何、どこ。」

「ほら、あの角っこのところ、屋台が出てるだろ。」

「屋台って、神社とかに出てるやつ？」

「いや、あれとはちょっと違うんだ。ほら、あの赤いのだよ。」

「あー、わかった。なに、お店？」

「そう。おでん屋さんだな、あれは。じいちゃん、若い時によく行ったんだぞ。」

そういや、最近見かけなくなったなあ。

保健所とか、警察がうるさそうなものな。

取り締まるんだったら、もっと別なもの取り締まればいいのに。

「ねえ、どんなのか見に行ってい？ちょっと寄り道だけど。」

「そうだな。折角だから入ってみようか。」

「えーいいの？入りたい入りたい。」

丸椅子に4人がけか。

はは、こんな子連れて入るの初めてだな。

「もうやっていますか？」

「いらっしやい。どうぞ。」

「ひーちゃん、何にする？」

「わたしねえ、大根。」

「ごぼ天とかガンモは？」

「おばあちゃんのご飯があるから、大根だけでいい。」

すんませんね、おやっさん。遠慮無しの、しけた客で。

「じゃあ、俺も大根もらおうかな。」

「一本、つけましょうか、寒いでしょ。」

「そうしたいところなんだけど、日のあるうちから赤い顔してたら、

孫に嫌がられるから。」

「だって、恥ずかしいもん。」

だよなあ。年頃のムスメにしたら。

「はい、大根。」

「わー、ほかほかー。」

おー、これはよく染みてて、身体が温まりそうだ。

「あつー。おいひー。でも、あついー。」

はっはっはっ、どっちかにしろよ。せわしないやつだな。でも、

「美味しい。」

「ありがとうございます。」

長いんだろうなあ、このおやっさんも。

あれから40年か、俺も年取ったなあ。やっぱ、飲みて一なあ、ちくしょう。

「ねえ、じいちゃん。わたし、やっぱ、じいちゃんちで暮らしたいなあ。」

「それはだめだ。」

「えー。孫、可愛くないの。」

「ひーちゃんは可愛いんだがな、お前のと一ちゃんが可哀想だ。」

中学生にもなると、親の役割ってだんだん小さくなるもんだからな。

けどよ、

「親っていうのは、子供の顔見て頑張るんだ。お前も家族の一人なんだから、

親のことも考えてやらないとな。」

「そりゃあ、そうだけどー。」

牛すじ、旨そうだな。

「3年も外国行って、それで帰ってきた時、友達誰も居なくなっちゃうよ。

そうになったら、わたし、一人でどうやって生きてらいいか、わかんないよ。」  
おれも、あのバカが、外国に転勤になるなんて思ってなかったけどよ。

「そんなものは、なんとかなる。そういう子供、ひーちゃんだけじゃなくて  
もう何万人もいるんだぞ。それに、人間生きてりゃなんとかなるもんだ。  
ねえ、おやっさん。」

「お嬢ちゃん、外国に行くの。」

「はい。父さんが外国の支店に行くことになって。」  
びっくりだな。俺が社長だったら、アラスカに飛ばしてやる。

「そう。

おじさんはさ、もうこの商売50年ばかりやってるんだけど、  
こんないい天気の日ばかりじゃないんだ。  
雨の日、雪の日、お客さんが一人も来ない日。  
どっちかって言うと、儲からない仕事だから、  
明日のお金が心配で、眠れないような時もあったんだよ。  
でも、一生懸命やってれば、なんとかなるもんだ。

そうやって、子供3人育てて、もう孫が5人もいるんだよ。  
子供らは引退しろっていうんだけど、おじさんはこの商売が好きでね。  
いまでも屋台ひいてるの。  
今日みたいに、いいお客さんに来ていただけると、嬉しくって  
しょうがないからね。」

いいおやっさんだ。

赤ちょうちんのオヤジって、みんないい人だ。

「じいちゃん、1本だけだったら頼んでいいよ。」

「ただいまあ。」

「まあまあ、遅かったわね。ひーちゃん、冷えたでしょ。  
おこた、入りなさい。」

「途中で、赤ちょうちんに寄ってたの。」

「あら、珍しい。」

「でも、大根だけだよ。ねえじいちゃん。」

「いやあ、おれは特別にお許しいたいで、1本だけ呑んじゃいました。」

「せっかく、内緒にしてあげたのにー。」

「まあ。・・・美味しかったですか。」

「はい。」

「私も、また連れてって下さいね。」

「はい。」

## side B

---

5時だ。

「お先にあがりませう。」

タイムカード、ガッチャン！ 事務室、事務室。

なんとって、今日は給料日なんだから。

「失礼ませう。」

「三本さんね。今月もご苦労様。ここハンコ押してね。」

「はい。」

やったー。

新しいブラウス買おうかなあ。パーマあてようかなあ。

「嬉しそうね。なんかいいことあるの？」

「いやあ、なんにも無いですよー。」

ほんと、おぼちゃんの想像するようないいことなんて、なんにも無い。

とほほ……。

「小野田くんにはあったの？」

「え？小野田さん？ 見てないですけど。」

「そう……。給料出たら、三本さん、映画に誘うんだって言ってたけど。」

「えー、知らないですよー。」

映画かあ、随分見てないなあ。ゴッドファーザーとか面白そうだけどなあ。

でも、社員さんとはあまりそういう関係になりたくないな。

折角見つけたパートなのに、壊れていづらくなるの、嫌だし。

「じゃあ、お先ませう。」

今度失恋したら、わたしこの町が嫌いになるだろうな。

”別れよう”って電話して。わんわん泣いて。三日間ぐらい何も食べれなかった。

何のために生きてるんだろう。

何のために、この四畳半の畳の上に座ってるんだろう。

そんなことばかり考えてた。

布団を頭からかぶって、丸くなって寝るようになったの、

その頃からだな。

だめだぞー。そんなことばかり考えてたら、また泣いちゃう。  
デパートで、銀装のカステラでも買って帰ろうかなあ。  
3切れだけ売ってくれないかなあ。

あ、しまった。

この道使わないようにしてたのに、通っちゃった。

あの公衆電話だ。

10円玉の落ちる音があんなに悲しかったこと、なかったな。  
心のなかで電話とらないでって、思ってたから。

もう一年になるのに。

お酒、飲んじゃうか。

「こんばんわ。」

「をっ!!! 久しぶりだねえ。なんだ、こざっぱりしちゃって、  
どうしたの。」

全然変わってないな。

大根がここで、じゃがいもが奥。厚揚げにガンモ。

で、なんでだかソーセージ。

あ、でもなんか、お玉がゆがんでる。

「一本つけようか。」

「うん。」

「てことは、給料日かなんか？」

「パートで働いてんの。ガンモ頂戴。」

パーマはいいや。

もうすぐ冬だから、コートとか買わないといけないだろうし。

「嬉しいねえ、また来てくれて。はい、コップ。」

来たー。

「くー、しみるー。」ぶはー。

「はっは、まんまだなあ。」

「えー。」

「あの頃のまんまだ。」

「おじさん、勘弁して。私、またボロ泣きしそう。」

そう、さっきから、おじさんが布巾でさっと拭くところとか、ラジオのフォークソングとか聞いていると、昔のこと思いだして泣きそうになってる。

「そんなつもりじゃなかったんだが、ごめんよ。」

「ううん。」

いつまでも吹っ切れない私がだめなだけ。

「さっちゃん、ちょっと店見ててくれる？ ちょっとトイレ。」

「いいよー、ちゃんと手洗ってねー。」

「おじさん。つぎ、大根頂戴。」

「はいよ。」

あ、足音が止まった。

新しいお客さんかな。流行っててよかったね、おじさん。

「こんばんわー。」

「らっしゃい。」

え！

「隣、いい？」

えー！

「ね？」

う、うん。

うわ、スーツだ、しかも髪短い。

「おれ、親父さんにボロクソに怒られて。お玉でぶん殴られて。

麻雀、競馬、パチンコ、全部やめて。ちゃんと学校卒業して就職したんだ。

いま、おっきな本屋で働いてる。」

そう。よかったー。ちゃんと立ち直ったんだ。

「みんな、さっちゃんのおかげだ。あの時、どん、って突き放してくれたから、俺、自分がどんだけ甘えたの馬鹿だったかって、分かったんだよ。」

私、でも、そんなあなたも好きだったよ。

「さっき、おやっさんが電話くれて。今直ぐ出てこいって。  
出て来なかったら、お前の一生終わるぞって。」

じゃあ、さっきの”トイレ”って。

「さっちゃん。もう絶対泣かせたりしないから。もう一度、俺と付き合っって・・・。」

「バカヤロウ！そこは結婚してくださいだろう、てめー！」

ひえー、この界限に響き渡ったよ、いま。

”んだなんだ、誰が結婚するんだって。”

”おー、若いっていいねえ。”

”おごってやるから、後でラーメン食べにおいで。”

やだ、周りから人が集まってきた。

「だって、さっちゃん。」

「もう。今度だけだからね。」

おじさん、それはちょっと、、、それ布巾だし・・・。

黄昏の王国 第1～6回

— 僕カノシリーズ —

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった。」

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

「僕と彼女と単純な関係式」

「僕と彼女と校庭で」

「僕と彼女と校庭で 夏」

「僕と、彼女のアリア」（次回）

— その他 —

いもうと

サマータイム・ブルーズ

危険なドライビングマジック

デフラグメント

インフルエンス あのころの僕たち

花舞い、名残り雪